

「宛名のない手紙(仮)」映画プロット

■ログライン

宛名を失った焼けた手紙。郵便配達員の男は、りんご並木に残された記憶と向き合う中で、“届けることのできない想い”と出会い、やがて自らもまた、その手紙を届けることを選ぶ。

■主な登場人物

ヒロシ(40 前後):郵便配達員。決められた宛先へ正確に手紙を届けることを信条としている。

古池 宏(88):りんご並木のボランティアであり、水引職人。「結ぶ」ことを生業としてきた人物。

中学生たち(13~14):りんご並木の手入れを行う生徒たち。過去と現在をつなぐ媒介。

老女(年齢不詳):毎年、同じ時期にりんご並木に現れる女性。過去に取り残された記憶の象徴的存在。

【あらすじ】

長野県飯田市。戦後の大火で一度すべてが焼けたこの町で、人々はりんごの木を植え、時間をかけて日常を取り戻してきた。その記憶を今に伝える場所が「りんご並木」である。

郵便配達員のヒロシは、毎日その並木の下を通っている。

決められた宛先へ、決められた順番で手紙を届ける。

彼は、手紙の中身を決して読まない。それが、この仕事のルールだと思っている。

ある日、仕分けの中に一通の手紙が紛れ込む。 焼け焦げた封筒。宛名も差出人もない。中の紙は半分ほど焼け落ち、残された言葉はわずかだった。

「……ここで待つて……」

封筒の裏には、小さく「りんご並木」とだけ書かれている。

差し戻すことも、配達することもできないその手紙を、ヒロシは手元に残す。

配達途中、ヒロシは並木で作業をする中学生たちと出会う。

剪定や手入れを続けるその姿は、町の中で静かに受け継がれてきた営みだった。

その中に、ひとりの老人がいる。古池という水引職人で、並木の世話にも関わっている人物だった。

ヒロシが立ち止まると、古池は手を動かしながら言う。

「結びつてのはな、ほどけたままにもできるし、結び直すこともできる」

細い紙をより、形を整えていくその手元を、ヒロシは黙って見つめる。

中学生のひとりがヒロシに尋ねる。「郵便屋さんって、どんな手紙でも届けるの？」

ヒロシは答える。「宛先があればな」

彼らは笑いながら言う。「じゃあ、“りんご並木”で待つてればいいじゃん」

ヒロシはそれを軽く受け流す。だが、その言葉はどこかに残る。

数日後、ヒロシは並木でひとりの老女の姿に気づく。

毎年、同じ時期に現れるというその人は、何をするでもなく、ただそこに立っている。

ヒロシは手紙について調べ始める。古い郵便記録、地域の資料、年配者の話。

確かなことは分からない。

だが、その手紙は、戦後の大火の中で行き場を失ったものではないかという考えに行き着く。

一方で、中学生たちは別の行動を始める。りんご並木の一角に、小さな箱を設置する。

宛名も名前も必要としない手紙を入れる場所——【アップルポスト】。

最初は遊びのように始まったそれは、次第に町の人々にも広がっていく。

言葉にできなかった想いが、静かに集まり始める。

ヒロシは、その様子を遠くから見ている。

その夜、ヒロシは自宅で引き出しを開ける。中には、焼けた手紙と、もう一通の手紙がある。

それは、彼がかつて出せなかった手紙だった。宛先を書けなかったまま、しまい続けていたもの。

翌日、ヒロシは古池のもとを訪ねる。

水引を結ぶ手を見つめながら、ぼつりと尋ねる。「ほどけたままのものも、結べるのか」

古池は手を止めずに答える。「結べるかどうかじゃない。結ぼうとするかどうかだ」

季節は進み、町には獅子舞の音が響く。

ヒロシはりんご並木へ向かう。アップルポストの前に立ち、しばらく動かない。

やがて、焼けた手紙と、自分の手紙を一つの封筒に入れる。そして、それをポストに投函する。

そのとき、あの老女が通りかかる。ヒロシは思わず声をかける。「……あの」

老女は振り返る。何かを言おうとするが、言葉にはならない。

ただ微かに口を動かし、静かに笑うと、そのまま歩いていく。

ヒロシはその場に立ち尽くす。やがて、ゆっくりと息を吐く。

——遠くで、獅子舞の音が鳴り続けている。

数日後。ヒロシのもとに一通の手紙が届く。まっさらな封筒。宛名は、ない。中身は語られない。

ヒロシはそれを読み終えると、りんご並木の方へ視線を向ける。

——風が吹く。木々が揺れる。

並木の下では、中学生たちが作業をしている。古池は変わらず、水引を結び続けている。

結び目は、不器用だがほどけていない。

ヒロシは、再び配達へ向かう。その足取りは、これまでとわずかに違っている。

りんご並木は、変わらずそこにあり、宛名のない想いだけが、静かにこの場所に留まり続けている。

そしてまた、誰かが、その場所に立つ。（終）